

## 負け戦の思い出

富山県 前田義雄

榎田神社へ武運長久を祈願参拜

私は富山県射水郡榎田村（現在大門町）生まれで、入隊したら生きては帰れぬかもしれないと思い、昭和十八（一九四三）年元旦零時氏神様の榎田神社へ武運長久を祈願し、一月十日小学校で送別会に出て、一里ある大門駅まで部落の方多勢、大きなぼり旗、日の丸の小旗を持って長い行列し見送り励ましてもらい、第二乙種の弱兵でしたが現役として富山三五連隊（現在富山大学）速連射砲中隊入隊。現在の野球スタジオあたりは練兵場で、射水線の電車はよい移動目標で射撃訓練等をやり、同年四月末に満州牡丹江省老黒山一二一部隊に移動後、本隊は沖繩へ移動の折に残留となり掖河の四一四部隊にしばらくおり、後に城子溝

の第二百十師団三〇六部隊速射砲中隊と再編され、南方戦線の後退のために我々部隊は南朝鮮沿岸警備に南下、三千保魚港近くの南陽面小学校に宿営し直ちに陣地構築の土方作業始まり、私は弱兵でしたので中隊の炊事担当を命ぜられ、時々来る米軍機に炊事の煙が見つからぬよう指示を受けた。そのころはまだ朝鮮の人は日本軍に協力的であった。

### 終戦の玉音放送

八月九日、ソ連は中立条約を破りソ満国境全域で攻撃侵攻し来たり、関東軍より「満州を守れ」の命令により我が部隊は緊急北上移動開始中、八月十五日終戦の玉音放送、私は南陽面小学校の教室で数人の兵隊と聞き、悔しいが仕方がない、戦いは終わったので家に帰れると思った。

公用で二人で町に出たら新聞社前に大勢の地方人が私たち二人を異様な目つきで見るので、早々に中隊に引き返す。戦争は終わっても部隊は命令

を守り北上。途中、大邱駅で南下する航空隊とすれ違う。彼らは北支から内地に帰る航空隊であった。「負けたんだ、終わったのだ、何で北へ行く、この列車に乗れ」と言ってくれたが、負けても軍隊は命令は守らねばと誘いには乗らなかつた。

朝鮮人が暴動を起こすかもしれないと車中も警戒体制で、機関士も逃げないように歩哨つき、無理やり北上。着いた所は平壤市師団駐屯の秋乙兵舎入り、八月二十四日だった。

### 武装解除

八月二十六日、営庭に武器弾薬が積み上げられ、先発のソ連兵立ち会った。この日よりソ連軍が怒濤のごとく押し寄せ来たり、ソ連軍の威を借りた朝鮮人治安隊が傍若無人の振り舞いを始め、万年筆、時計は全部取り上げ、連隊旗は八月二十八日秋乙営庭の一隅で密かに奉焼されたと聞く。

### 三合里

昭和二十年九月二日はミズリー艦上で無条件降伏の調印式があったと聞くが、当日平壤地区にいた日本軍はとても惨めな姿であった。約三個師団三万余の日本軍が二十四キロ、六里先、三合里収容所に今日中に入れのソ連の命令出る。中隊命令で各自寝台のわら布団を半分に切り、リュックサックを作り携帯食料と日用品を詰め、馬にも鞍はないが毛布で鞍がわりに食料を目いっぱい積んで出発した。出発してみると五、六メートル幅の道を各部隊が行軍、隊列は一列縦隊とならざる得ず、大きな布団袋のリュックをかつき、馬には山盛り荷を積んだ五列くらいの部隊行列。命令伝達は全く通じなくなり、また、とても暑い日で馬には水もやれず暴れる。人も水がない。渋滞で前は進まない。ソ連の歩哨がマンドリン銃をバリバリ発砲し早く進めとおどかす。暑い、水がない、苦しい、悔しい、はがやしい、みじめ。素晴らしい日本軍隊でしたが、朝鮮人の前に情けない姿をさ

らして残念の思い、言葉にならず。六里の道が夜になってもなかなか着けない。目の前に入口があるのに進まない。人員を数えるのに十列でない回数えられないソ連兵なので手間取っている。門内には馬は入れない、荷物各自持っているだけ。大きい荷物は全部、馬も門前に捨て、山となる。その混乱はこの世の姿ではない。

三千人くらい収容できる仮兵舎へ三万余入れられたので寝るところはない。軒先に天幕を張り野営の状態、疲労と心労で全員クタクタ、一時の眠り、目を覚ます。薄明るい。兵隊が多すぎて便所に困る。入口の方を見ると昨夜捨てた将校の行李が山のように捨ててあり、主をなくした軍馬がたくさん放しっぱなしで、朝鮮人が持ち去り、その日のうちに全部なくなる。命に代えてかわいがった愛馬もどこへやら。

その日、素晴らしいよい天気だった。将校は一時別の所に収容されたので本隊は混乱していた。それでも腹が減る、各自飯ごう炊事したいが薪が

ない。馬屋の腰板は全部なくなり、所内の松の木、全部使い切り、根を掘り燃やすも生で燃えない。水がない。便所に困る。四方有刺鉄線送電してあり、自動小銃の歩哨がたくさんライトをつけて監視、それでもつらさに耐え切れず夜に逃亡する人あり。しかし逃げ切れず戻って来たときに見つかり、二人向かいの丘の上で銃殺され、皆に見せしめされた。そのころ千人単位の作業大隊に編成され、私らは中津大隊（大尉）石川中隊となる。

### 二袋の乾パン

各自が力の限り背負ってきた食糧も若い兵士に長もちしない。非常用食糧として二袋の乾パンは絶対に残すように命令が出ているも、背に腹はかえられず乾パンを一個食べ二個食べ、そのうまいこと、おいしいこと、二袋の乾パンも一カ月くらいでなくなり、何とか二袋の食糧は用意せねばと炊事に頼み大豆をいって詰めたが、それがまた大

豆一粒ずつ抜き取り食べ、袋はがさがさになる。空腹、ひもじい、餓鬼の生活だった。

「ヤボンスキー、スコーラ、ダモイ」いつもたまさかれて持ち物検査たびたびあるも、一月四日貨車に乗せられ移動。どこに行くかは知らされない、帰れるかも。車中飯ごう炊飯は煙いのとトイレに困る。一週間で日本海側の興南本宮日本窒素会社の寮に入る。小学校くらいの五百人入れる寮が五棟あり、咸興港へ船積み作業に毎日駆り出された。ソ連は朝鮮米、牛、機械類をどんどん没収して自国に送る。その作業に日本軍が使われた。

終戦後八月より旧軍隊の食糧ばかりで生野菜を食べていないので全員ビタミンC欠乏症となり、体力低下、疥癬病が蔓延、全身カユイ。おおぜい入院するも薬なく栄養失調等で死亡続出。私の戦友、植松満春君も他界した。炊事から出る食事はコウリヤンと大豆、馬と同じ食べ物、でも腹が減るので皆食べた。軍医の指示により、炊事の燃料のまき取り、山へ生の松の木を取りに行く作業あ

り、そのときに青い松葉を取ってきて毎食赤いコウリヤン飯と一緒に食べ、生野菜のかわりのビタミン補給で大分命が助かりました。私は炊事班で作業には出ませんでした。材料が少ないのと悪いのには参りました。玄米運搬の作業中、歩哨の目をかすめ持ち帰った玄米を瓶で突いて白米にして食べた味は忘れません。

九月より半年、米のごはんは食べていない。私も山へ松の木取りに行きました。途中小学校に収容されている地方人の方々がおられ、私たちも俘虜の身で前後に歩哨がいるので何もしてあげられないことは分かっているのに、兵隊さん助けて、兵隊さん助けてと、声をからして叫ぶ声、姿は、今もはっきり思い出します。持っていた松の木を投げてやり「ガンバレヨ」と励まし、歩きながらのことです、止まるとバリバリと撃たれます。戦い終わって九カ月たっているのに、一般地方の人々は食糧、燃料もなく、幼い子は全部栄養失調で亡くなり、毎日手作りの担架に四人でかつぎ近

くの中へ埋めに行く。女の方は皆丸刈りで顔を黒くし防空頭巾にモンペ姿、哀れさも言葉になりません。軍人はまだ団体行動しているのでまだ良いと思いました。

### 遂にソ連ポセットに上陸

昭和二十一年五月、ダモイ整列で乗船、ホントかウソか？ やっぱり船は北に走り、ソ連領のポセット港に上陸。馬用の太い針で四種混合の予防注射は痛く皆ダウンした。六月、同駅東方六十キロメートルのホルホーズで小隊は大天幕を張り野営しジャガイモ畑の草取り作業。私は小隊の炊事担当で、支給される雑穀や少ない塩、油、腐りかかったジャガイモでは、若い兵士の腹は満足させることはできず、食べれる野草はないかと思つたのが「アカザ」、あくどいがあく抜きすると食べられる。生野菜不足で悩んだ我々でしたので、一生懸命取ってきて少しでも量を多くと、雑炊を作って食べてもらった。河に魚がいたので捕まえ

て皆を喜ばせようと考えたが、道具がないのと、魚の方が利口で逃げられ悔しい思いをしたことがあります。

### シベリア鉄道

七月二十日、また貨物列車に積み込まれて西へ西へと大平原を大型列車は八十キロ〜百キロくらいで走る。車中の炊事は大変で、大型貨車に四個大釜を据え、まきでコウリャン飯を炊き一斗だるに詰め、梅干と一緒に、停車したとき飯上げの号令で各車に配る。二十一日間同じメニュー。

走行中の炊飯は、スピードが速いので煙が外に出ない、車中にこもり煙くて人は立っておられない。床に腹ばいになりドアの下隅から鼻先を少し出して息をする。余り顔を出すと速いので息ができず苦しかった。各車は外から鍵をかけられ馬扱い、大小便に困る。十五センチほどの戸のすき間に外に「とい」を作り、そこから外へ流し出す。水がないので臭い。飯上げのときは戸が開け

られるので一齐に外へ飛びおり、少し遠くでと十メートルほど離れるとバリバリと銃弾が飛んで来る。

バイカル湖畔を一日半くらい走り砂漠地帯に入る。左手に高い山頂に雪のある山脈が見え、ヒマラヤ山脈でないかとうわさし、どこへ連れて行くのだろうと不安でしたが、着いた所は中央アジアのウズベクのタシケント貨物駅。梅干しばかりのおかげで病人も案外少なく、第十三収容所に入る。三メートルくらい土ブロック塀に有刺鉄線、塀の内側に四メートルくらい砂をまいた空地、その内側にまた有刺鉄線、四隅の望楼台には歩哨が自動小銃を構えている。私たち、土間大部屋の二段ベッドに落ち着く。翌日各作業現場へ歩哨つきで引率されて、紙工場、自動工場、建設現場、農場、貨物駅の仲仕等、ノルマをかけられ悔しい労働に追い立てられた。私は弱兵ということ炊事係として所内で働く。箸は全く要らない、つまむものがない。黒パン少しと雑炊のみ。大釜に洗面

器三杯のアフを入れ、炊くとのり状になる。そこへ野菜、塩、油を入れたもの。米は一粒もない。

栄養不足と空腹はマンネリ、あきらめ、だが何とか元気で日本に帰りたい気持ちは強く、駅仲仕の作業に塩、砂糖、タバコの積荷作業に出合う場合あり、歩哨の目をかすめ共同作戦で少しづつ盗み帰る。出口で身体検査あるも、うまくごまかして持ち帰り、みんなで分け合って塩分糖分の補給に努めた。あるとき貨物駅に五〇トンタンク車、調べたら鯨の油だったので、各自水筒に入れ、帰り、炊事に渡し喜ばれたことあり。

とんでもない遠い所まで連れて来られ、帰りたいたい毎日で毎日を過ごしていたある満月の夜、ふと故里を思い出し、ああこの満月を日本でも見ているのになあと悲しい思いをしたこと、今も忘れません。

二年くらいしたらソ連側とも仲良くなり出し、民主化運動も始まり、共存のムードとなり、何事もスムーズに進むようになりました。そのころ、

皆帰りたい気持ちで作業しているのを唄にしてくれた方あり、皆で唄っていました。紹介します。

「つばくろの歌」

作詞 小坂 仁史  
作曲 北村 武夫

一、いつも夢見る大空の

遠い彼方のふるさとへ

飛んで帰れば幼な友

その日そのときと来る

吾等は若いつばくらめ

二、熱い血潮のこの胸に

じっとこらえる明け暮れの

希望のときがあればこそ

その日そのときと来る

吾等は若いつばくらめ

三、今日の仕事の帰り道

こゝ迄来たのも一緒なら

お互い元気で頑張ろう

その日そのときと来る

吾等は若いつばくらめ

(昭和二十二年頃タシケント

第十三収容所抑留中)

ダモイ

帰れるぞ、帰れるぞ、帰れるぞ。待ちに待っ

た、あきらめさせました帰国、ついに来た。昭和二

十三年六月三日、タシケント、貨物列車で出発。

あのうれしさはまた何に例えようのないうれし

さ、喜びであった。体験者でないと味わえない嬉

しき。

列車は東へ東へ、だんだんと日本に近くなる。

ドアは開け放し、気分は満点、思い出してもうれ

しいシベリア鉄道。砂漠もバイカル湖も過ぎナホ

トカ港に着く。天幕生活で待機に入る。海岸地帯

なので水道なく、多勢で天幕の中は熱い。水はな

い、一日コップ二杯くらい。私の人生中、水がな  
く困ったこと一番ひどかった。自由の身でないの  
で動けない、地面を掘っても塩水でだめ。

### 乗 船

七月十一日ついに乗船、一人一人名前を呼ばれ  
乗船。名前を呼ばれてよかったと、ほっとしまし  
た。一人名前を呼ばれず残った方がおられ、どう  
言葉をかけるか困った場面あり、最後までどう変  
わるか気の抜けぬ国でした。

引揚船遠州丸はついに起航、船内には迎えに来  
られた看護婦さんが、永いことご苦労さまと声を  
かけて下され、日の丸おにぎりを配られ、日本の  
味に感動しました。

七月十四日、舞鶴に上陸、たくさんの出迎えを  
いただき帰った。万歳でした。三日諸手続を済ま  
せ、十七日出発。福井大地震で北陸線不通にて高  
山線回りで帰宅、両親はととても喜んでく  
れ、親戚も集まっておられました。

今八十一歳まで生き、何か私ばかり長生きして  
申し訳ない気もします。多くの戦友がソ連の地で  
凍土の中に埋められていること考えると合掌せず  
にはおられない。

近年地域の依頼で小・中学校、文化ホール等で  
抑留のつらさを語る講演をする機会を与えられ、  
慰霊のためにも力を入れて続けようと考えていま  
す。色々苦しい体験をいたしました、それが  
私の人生の土台となり、今日があるように感ぜら  
れます。

お目通しいただき誠にありがとうございます  
た。合掌

### 【執筆者の紹介】

富山県射水郡大門町出身、大正十一年八月二十四  
日生まれ、父 前田彦太郎氏の次男

昭和十八年一月十日 富山三五連隊入隊

同年四月末

満州牡丹江省老黒山一二

一部隊移動 本部隊隊沖

## 縄へ移動の折残留

残留城子溝第一二〇師団三〇六部隊速射砲中隊に  
編成南朝鮮沿岸警備中 二十年八月 終戦抑留

昭和二十三年七月 復員

## 抑留の日々脳裏去来す

抑留より解放され舞鶴港に上陸してより五十有  
余年を過ぎて、何の資料も持ち合わせなく、ただ  
記憶を呼び起こしつつも細部については忘れ去っ  
たことの方が多く、お読みいただくほどのことも  
書けず慙愧にたえず御寛容のほどを願います。

大正四（一九一五）年十二月、北陸の河口につ  
くられた港を持つ小さな町に生を受けた。

家族は祖母、両親、兄三人、姉二人あり、六番  
目の子である。後に妹三人、第一人が生まれ、十  
人兄弟姉妹であった。父の職業は回船業であり、  
各種保険の代理店を営み、町の議会議員を五期勤  
め、昭和七（一九三二）年六月、五十三歳の若さ  
で病没した。

私は昭和八年三月、商業学校を卒業したが、当  
時は不況のさなかであり、大阪、東京と奉公先を  
転々とし、昭和十一年の徴兵検査に第二乙種合格  
となり、当分入営がないとのことにて意を決して

財団法人全国強制抑留者協会主催、富山県支部富  
山市民プラザでのシベリア抑留展示会に井波町文  
化センター抑留の苦勞を語り継ぐ会、井波町立中  
学校、庄川町立小学校、高岡市立中学校と抑留当  
時の苦勞を戦争知らない人に語り継ぐため支部協  
会の活動に奔走され、期待している。

（富山県 山田 秀三）

## 我が応召抑留の記

富山県 中村 嘉郎

国の為と説きつ説かれて望郷の  
抑留の日々堪えるも空し

誰が為か誰が故なるやシベリアの